

氏名（本籍）	田村南海子（埼玉県）
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第 7008 号
学位授与年月	平成 26 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	小島成斎の書学と書法に関する研究

主査	筑波大学教授	博士（芸術学）中村伸夫
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）森岡 隆
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）守屋正彦
副査	国学院大学准教授	博士（芸術学）橋本貴朗

## 論文の内容の要旨

### （目的）

小島成斎（寛政8年～文久2年、1796～1862）は、幕末の儒者で、備後福山藩士。今日では能書家として知られている。当時の唐様書家の代表的存在の一人であり、巻菱湖、貫名菴翁、市河米庵とともに「幕末四大家」に数えられることもある。本論文は、中国から伝わった各種の伝統的書法が小島成斎においてどのように受容され、それがどのようにみずからの制作に応用され、更にはその成果が日本における唐様の書の系譜にどのように位置づけるのか、という問題を解明することを目的としたものである。

### （対象と方法）

小島成斎の伝記的事実を究明するための墓碑などの一次史料をはじめ、肉筆および拓本などの書の作品、跋文その他、書に関する理論的側面を知るための各種文献など、従来の史料に加えて、これまで知られていなかった多くの新史料を縦横に駆使し、提示した問題を解明すべく、多面的な角度から論究している。

### （結果）

本論文は以下のような結論を導いている。

小島成斎は、市河米庵に師事して書法の基礎をかため、その後、＜孔子廟堂碑＞や＜開成石經＞などの唐代の石刻の楷書を中心とする中国の伝統的書法に心酔して独自の書風を形成するに至った。その際、学問の師狩谷棧斎の考証学に影響を受け、文字そのものを厳格にあつかう態度を培い、学芸一体の書をみずからの実践によって実現した。また、これを当時における書の教育に結びつけたところにも独自性が認められるとし、この時代の書の発展に大きく寄与することになったと結論

づけている。

#### (考察)

本論文は、序章、第1章～第5章、結論によって構成されており、各章において以下のような考察がなされている。

序章「本稿の目的と方法」では、従来の研究成果を踏まえて各種問題点に言及し、書学と書法の両面からの包括的研究の必要性を述べるとともに、本論文の目的と方法について具体的に提示している。

第1章「小島成斎の生涯」では、主として「小島成斎先生墓表」（個人蔵拓本）に依拠し、他の文献史料との比較校合を行った上で、小島成斎の生涯についてまとめている。加えて、従来は見過ごされてきた各種史料における異同についても詳細に調査し、これまでにはなかったより正確な小島成斎に関する伝記的諸事実を提供するに至っている。

第2章「小島成斎の書学」では、多くが個人の収蔵家によって収集保管されている小島成斎の書学に関わる史料を集成し、これを年代順に整理して内容を確認した上で、その推移を論じている。特に、小島成斎自身による法帖の刊行事業において、狩谷棊斎の考証学的手法を踏襲し、従来からの釈文の誤りを正し、より正確な書学の方向性を志向したところに先見性が認められるとし、結果的にはこのことで江戸時代後期の書学の進展に大きく寄与することになったという結論を導いている。

第3章「小島成斎の書」では、生涯を通しての小島成斎の書の変遷について分析を加え、全体を以下の3期に分類できることを提示している。市河米庵に師事し、楷書・行書ともに米庵流の特色が顕著にうかがえる第1期（17～22歳）、狩谷棊斎に師事し、楷書は唐の虞世南、行書は晋の王羲之に範を取り、揮毫の用途に応じて他の古典的書法にも依拠し、彼の書がもっとも高い水準を示した第2期（26～58歳）、中風を患ったのち、主として唐の顔真卿の楷書に傾倒したが、従来の筆力が影を潜めるようになった第3期（59～67歳）。加えて、第3期に揮毫された虞世南風の楷書の作品は、門人による代筆の可能性が高いことを導き出している。

第4章「小島成斎の書における虞法」では、小島成斎の第2期の書をもっとも特徴づけている唐の虞世南の楷書法「虞法」に着目し、具体的な作例を挙げてこれを分析し、その熟達度について他の能書家の書との比較を通して考究している。その結果、〈真書千字文〉などの作品を頂点として、「虞法」がもっとも技術的に高い水準に達したのは50歳代であるとの結論に至っている。

第5章「小島成斎の用印」では、小島成斎の作品に押されている印について網羅的な調査を行い、その整理結果を、真偽の鑑定ならびに無紀年作品の年代推定に応用している。また、いくつかの作品にみられる特殊な押印法について考察を加え、その依拠するところを明らかにしている。

### 審査の結果の要旨

#### (批評)

幕末の儒者で、能書家として知られ、森鷗外の史伝『渋江抽斎』などにも書の教育者としての姿が描写されている小島成斎ではあるが、同じく幕末に生きた唐様の書家、貫名菴翁や市河米庵などにくらべ、これまで必ずしも十分な研究が行われてこなかった。その理由の第一として挙げられることは、この人物の伝記的史料のみならず、書跡に関する史料の存在が従来はごく一部のものに限

られ、新史料の発掘作業とその整理分析が不十分のままであったことである。本論文が高く評価できる第一の根拠もまずはこの点にあり、小島成斎の生涯にわたって、伝記的事実を究明するための一次史料をはじめ、書に関する理論的側面と実践的側面の両面にわたって、これまで知られていなかった数多くの原典史料を十分な時間と労力を費やして調査発掘したことである。

そして、本論文が高く評価できる第二の根拠は、これらの史料を多面的な角度から分析し、論文執筆の目的として提示された課題に対し、堅実な手法により論を展開し、説得力のある結論を導き出している点である。書跡の研究には不可欠の用印の諸問題に関して、詳しい検討結果を導いていることも特筆しなければならない。個々の印の使用時期や回数などの精査をふまえ、作品の真偽ならびに無紀年作品の年代推定に応用できていることも評価したい。

総じて本論文は、いまだ不十分な江戸時代後期の書の研究の進展に少なからず寄与しうる学術成果として高く評価できる。今後は小島成斎における考証学的能力が実態として書学の領域にどのようなにかかわっていたのか、という問題のより具体的な解明、更には小島成斎の周辺にも視野を広げた、当時の唐様の書全体に関する体系的な研究を望みたい。

平成26年1月27日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。